インド留学記

その11

二度目のインド国内旅行（3）

大学教授
沢岩
金助島

ベナレスのチベット人デモ隊

残されたわれわれ男性四人は、その日午前一一時のバスでベナレスへ向かう。堅い座席で半日ほど揺られて、いいかげんお尻が痛くってしょうがないと思うころ、夜の一〇時にベナレスに到着。その夜は、安宿（Herman Hotel）に、四人相部屋で泊まる。一人三ルピー五〇パイサ（一〇五円）だ。

翌三月九日朝八時半に起き、新婚旅行中の義理の妹夫妻に会いに、ホテル・ド・パリス（Hotel de Paris）へ。昔は藩王の迎賓館だったところとかで、広い庭園のある立派なホテル。今の僕にはまったくの別世界だ。朝飯だけを御馳走になって早々に退散。近くの宿探しに出かけ、政府経営の安宿（Traveller's Lodge）に決める。午

インド全図およびその周辺地図

後は乗合観光バスで、サールナート（鹿野苑）へ。ここはブッダ・ガヤーで悟りを開かれたお釈迦さんが、はじめて説教された（初転法輪）ところだ。やはり観光バスだと印象が薄くなる。ともかく型どおり一回りして再びベナレスへ。夕方はまたホテル・ド・パリスで豪勢な食事。当然おごりだ。帰りにはおみやげのナポレオンまでもらってしまう。

翌日（三月一〇日）はなんだか疲れが出て一〇時起き。ガンジス河近辺を一回りする。狭い路地から路地へ、寺院の間を通り抜けるようにして、ガンジス河へ。沐浴風景を見ても、河原の死体焼き場で死体を焼いているのを見ても、「ああ、やってるな」と思うだけで、なんだか何も感じない。ぶらぶらしていると、途中でチベット人デモ隊に出会う。反中共デモだ。今の日本で見かけるメーデーなんかの、静かなデモとは相当雰囲気が違う。もちろん日本でも、七〇年前後には、全共闘が街頭でジグザグ・デモをやって機動隊とぶつかるということもよくあった。だがそれともどこか違う。一人一人が拳をふりあげながら、大声で叫びつつ、進んでいく。一人一人から「俺たちは本当に怒っているんだぞ」という気迫がひしひしと伝わってくる。当然交通はマヒだ。彼らはどうしてそんなに怒っているのだろうか。

中共がチベットに侵入したのは、一九五九年のことだった。それまでのチベットは、ダライラマが国の政治的頂点（王）でもあり、宗教的頂点（法王）でもある、神権政治の仏教国だった。中共の侵入により、ダライラマ一四世は国を追われ、多くの僧侶とともに貴重な経典類をたずさえて、インドに亡命した。そして今では、インド西北部のダルマサーラに住んでいる。

そのおかげで、そののちチベット仏教研究は急速に進んだ。というのは、それまでチベット

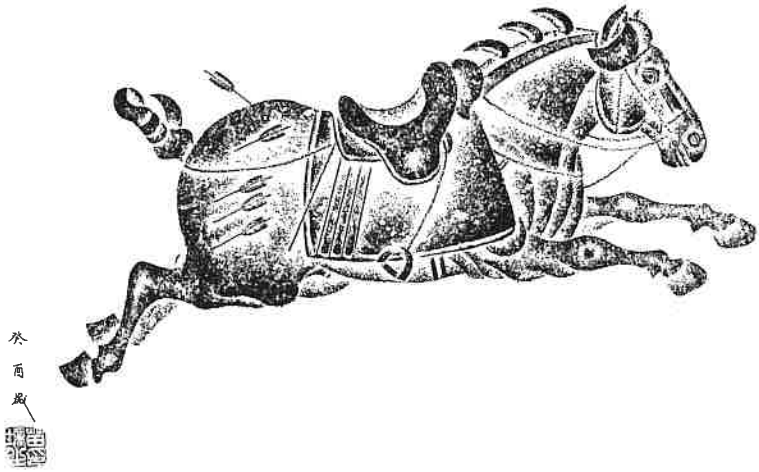
はほぼ鎖国状態で、チベットに入るには決死の覚悟がいったからだ。日本人でも、河口慧海（『チベット旅行記』旺文社文庫）、多田等観（『チベット』岩波新書）、青木文教（『秘密の国西蔵遊記』中公文庫）などが、チベット仏教などを学びにチベットに入った。だがそれらはすべて、ばれれば殺されるかもしれないという危険を冒して、チベット人に化けて潜入したものだ。それが、チベット学僧たちのほうが、世界各地に亡命して直接チベット仏教を教えるようになり、またこれまで目にすることのできなかったチベットの経典類が彼らとともに国外に持ち出されて、公刊されるようになったのだ。だから、そののち研究が急速に進歩したのも当然のことだろう。

だが今問題なのはそういうことではない。今ここで亡命したチベット人たちが、怒りに満ちて反中共デモをしているということが、問題なのだ。大学でチベット語を学んだとき、現代チベット語の読本として、チベットの新聞記事から抜粋されたテキストを読んだことがある。そこには、中国の人民解放軍がチベットを解放したことで、これまでダライラマを頂点とする僧侶たちに搾取され続けてきたチベット人民の生活が、いかに自由にかつ豊かになったかということ、それを実現させた毛沢東思想がいかに偉大であるか、また解放軍兵士とチベット人民がいかに仲良くやっているか、などというようなことが延々と書いてあった。中国の侵入によって結果的にはチベットの一般の人々の生活が良くなった。そういうことは確かにあるのかもしれない。しかしそのことが、これみよがしに新聞記事として次々と掲載されていくという状況は、いかにも異常で、うさんくさい。チベット人と中国人（漢民族）とは、民族も異なるし言葉も文化もまったくといっていいほど違う。ま

た歴史的にも、チベットは、七、八世紀に吐番王国を作り上げて、中国と戦って勝ったことさえある国だ。そしてその後も、神権政治の前近代的国家という形ではあったが、まがりなりにも一つの国を形作ってきていた。そこに中国が侵入してきたのだ。そして今ではチベットは、中国の自治区の一つだということになっている。チベット人の子供たちは、いま学校で、チベット語以外に中国語も学ばなければならないはずだ。人民解放という大義名分があるにしろ、やはりこれは侵略だと言うべきだろう。だから彼らはこんなに怒っているのだ。こんなことをぼんやり考えながら、チベット人のデモ隊が目の前を通り過ぎるのをながめていた。

仏陀の悟りの地ブッダ・ガヤー

一〇日の夜に汽車でガヤーまで行き、その日はそこに泊まり、翌朝一〇時に乗合リキシャで、



ガヤーからブッダ・ガヤーへ。ネーランジャラー（尼連禅）河沿いに約一〇キロの道のりを、リキシャはのんびり走っていく。すぐにブッダ・ガヤーに到着。ここの中心はもちろん、今から千五百年ほどまえに、仏陀がその下で悟りを開いたとされる菩提樹（成道の木）だ。菩提樹の下には、仏陀がそこで禅定にふけったとされる赤砂岩板の金剛座がある。その樹の下に立つとさすがに感無量だ。個人的には自分のことをそれほど熱心な仏教徒だとは思わないが、やはり仏教徒の血が色濃く流れていたのだ、と思わざるをえない。菩提樹の隣には、高さ五三メートルの大塔マハーボーディ寺院がある。この大塔は、いくども再建と改修を重ねたものだが、もともとは、インドに一大帝国を建設し仏法に基づいて国を統治したアショーカ王によって、紀元前三世紀に建てられたものだ。

この仏陀の悟りの地にはまた、仏陀の遺徳をしのんで建てられたアジア各国の寺院がある。まず上座（小乗）仏教圏からはスリランカ寺院とタイ寺院が、次に大乗仏教圏からは、中国寺院と日本寺院が、そして密教圏からはチベット寺院とブータン寺院がというように。このようにアジア各国から、仏教徒たちがこの地を慕ってやってくるのは壮観だ。インドで発生した仏教が、長い年月をかけてアジア各地に広まったのだ、ということがまさに実感として迫ってくるというところがある。しかし肝心のインドでは一三世紀に仏教は滅びてしまった。今ではインドは、ヒンドゥー教徒が人口の八割を超すヒンドゥー教の国だ。

この日の泊まりはまた政府経営の安宿（Tourist Bungalow）。相部屋で、まるでハンモックのようなベッドに寝袋を広げて寝る。だが宿代は格安だ。なんと一泊五〇パイサ（一五円）。私がインドで泊まった最安の宿だった。